コレンテ　vol. 40　n. 343　　giugno　2019

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 32

## ＊ラテン語の愉しみ＊

深草 真由子

「ラテン語のないリチェオなんて.....」

友人が深いため息をついている。かわいい孫の選んだ進学先が気に入らないのだ。

イタリアの高等学校〈リチェオ〉では、文系のリチェオ・クラッシコでも理系のリチェオ・シェンティフィコでも、ふつうラテン語が必修である（クラッシコでは古代ギリシア語も）。ラテン語に割かれる時間はクラッシコで週四、五時間、シェンティフィコで三時間。国語や英語、数学と並ぶ重要な科目である。学生たちは名詞の格変化rosa, rosae, rosae, rosam, rosa, rosā（バラが、バラの、バラに、バラを、バラよ、バラによって）から文法をマスターしていくと同時に、ラテン語作品の読解にもチャレンジする。こうして古代ローマの歴史、文化を学び、西洋人としての教養を身につけた学生たちは、最後にマトゥリタとよばれる国家試験を受け、高校を卒業する。

ところが、何年か前の教育改革でシェンティフィコに応用科学科が新設された。そこでは情報学を学ぶことができるのだが、その代わりにラテン語はまったくやらない。彼女の孫はそのコースを希望し、無事入学が決まったのだ。

元ラテン語教師の彼女は、古典や歴史の知識を育むことの大切さを人一倍認識している。だから彼女にはどうしても合点がいかないのだ。自分の孫が、そして、大学に進学することになるリチェオの学生たちが、つまり将来、人にものを教えたり組織をマネージメントしたりすることになるであろう者たちが、ラテン語を知らないままでいるなんて.....。さらにまわりの人が口々に「ラテン語なんてやってもねえ」などと言うものだから、いつもは口達者で議論好きの彼女もさすがに参ってしまった。

（実際、ラテン語を勉強するのは高校生全体のおよそ半数である。イタリア人はみな学校でラテン語をマスターするものだと思いこんでいた筆者は、この事実にたいへん驚いた。）

【田舎の小さな教会の入り口にはこんなフレーズが。「旅人よ、立ち止まれ。これは主の家であり、天への扉である」】

O tempora, o mores！（「なんという時代、なんという風習！」）、ラテン語不要論がまかり通

ってしまう時代なのである。それでもやはり、ラテン語も、ラテン語で幾世紀にもわたって培われてきた文化も、イタリアの現在に生きつづけていると言わねばならない。ラテン語はけっして死語ではない。それどころか、その伝統は一度も絶えたことがないだ。

そもそもラテン語は古代ローマの公用語である。ローマがCaput mundi（世界の首都）と称えられるほどの繁栄を極めたころ、キケロー、ウェルギリウス、カエサル、ホラーティウスなどが、ラテン語ですぐれた作品を生み出した。これらの作家たちの生きた時代、紀元前後の古典期の書きことばが、今日学校や大学で学ばれる「ラテン語」である。

中世からルネサンスを経て、十八世紀に至るまで、ラテン語はヨーロッパの知識人の共通語であった。ヒエロニムスが聖書をラテン語に翻訳した四世紀から、ローマ教皇がラテン語でtweetする二十一世紀の今日まで、ラテン語は教会の言語でもある。

イタリアでときどき耳にするラテン語の名言を挙げればきりがない。Alea iacta est「賽は投げられた」、Panem et circenses「パンとサーカス」、Pecunia non olet「金は匂わない」、Per aspera ad astra「苦難を乗りこえ天へ」、Risus abundat in ore stultorum「愚か者たちの口元に笑いがあふれる」、Habemus papam 「教皇が選出された」、Cogito ergo sum「我思う、ゆえに我あり」など。

ラテン語をもっともよく目にする街はやはりurbs aeterna（永遠の都）ローマであろう。マンホールに描かれたSPQR （Senatus Populusque romanus「元老院とローマの人民」）のほかに、どんなものがあるだろう。

たとえばフラミーニオ広場のポポロ門には、十六世紀に行われた修復を記念するこんなラテン語の碑がある。PIVS IIII PONT MAX PORTAM IN HANC AMPLITVDINEM EXTVLIT VIAM FLAMINIAM STRAVIT ANNO III. 「教皇ピウス四世は在位三年目に、門を現在みられるような壮麗な姿にし、フラミニア街道を拡張した」。

【ポポロ門の碑の一つ】

またその左右には、ANNO MDCCCLXXIX RESTITVTAE LIBERTATIS X TVRRIBVS VTRINQVE DELETIS FRONS PRODVCTA INSTAVRATA. 「解放から十年目の１８７９年、両塔が解体され、ファサードが拡張、再建された」、SPQR VRBE ITALIAE VINDICATA INCOLIS FELICITER AVCTIS GEMINOS FORNICES CONDIDIT. 「イタリアの都市（ローマ）が解放され、無事に住民らが自由を取り戻すと、市は二本のアーチ型通路を築いた」とある。

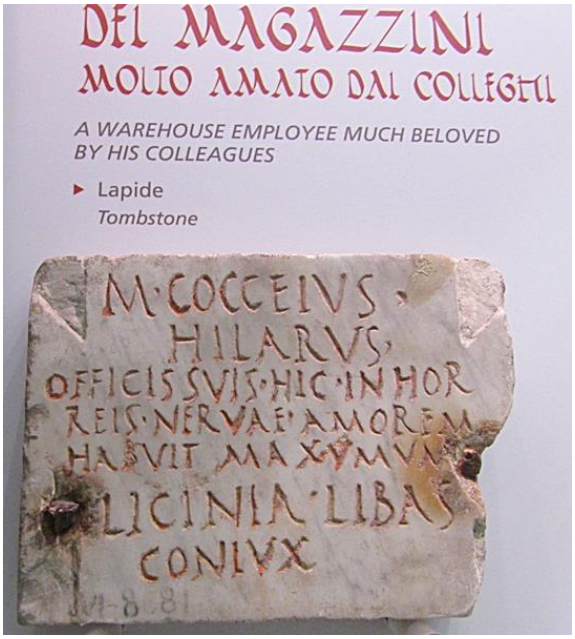
１８７０年、それまで教皇の支配下にあったローマはピエモンテの軍隊によって解放され、その翌年、フィレンツェにかわって統一イタリアの首都になった。リソルジメントの興奮が伝わってくる。

共和国広場の近くには、古代ローマ人の文字による記録を今に伝える博物館もある。ディオクレティアヌス浴場跡内の、Museo della Comunicazione Scritta dei Romaniというセクションである。紀元前七世紀のものとされるブローチに刻み込まれた、ラテン語のもっとも古い銘（プラエネステのフィーブラ）から、三世紀から四世紀にかけて作られたキリスト教徒の墓碑銘まで、陶器や石、金属に記されたラテン語の記録が集められている。興味深いものを二点紹介しよう。

まずは一世紀の碑で、ラテン語文法の基礎的な知識で読むことができるもの。M COCCEIVS HILARVS OFFICIS SVIS HIC IN HORREIS NERVAE AMOREM HABVIT MAXYMVM LICINIA LIBAS CONIVX. 「マールクス・コッ

ケイウス・ヒラルスは、ここ、ネルウァの倉庫で奉仕していたとき、きわめて大きな愛を受けた。妻リキニア・リバス」。

妻が亡き夫にささげた碑である。それにしても夫マールクスは「きわめて大きな愛を(AMOREM MAXYMVM)」誰から得たのであろうか。主人の寵愛を受けたということなのか、倉庫で妻なり愛人なりと愛しあったということなのか。碑文からは明らかではないが、博物館の説明によれば、職場の同僚たちにたいへん慕われていたことを意味するようである。




【マールクス・コッケイウスの碑】

二つ目は青銅の板に刻まれた碑で、紀元前三世紀末から二世紀のはじめにかけてのもの。古典期よりさらに古い時代のラテン語が使われているから、読むのが厄介である。II RVTILIVS M F IVNONEI LOVCINA DEDIT MERETOD DIOVOS CASTVD. 「〈ユーピテルの禁欲〉にあたり、マールクスの息子プーブリウス・ルティリウスが、御業に感謝してユーノー・ルーキーナに（贈りものを）ささげた」。

出産の女神に子の誕生を感謝する碑である。子どもが生まれるとしばらく、ユーピテルがユーノーに対してしたように、夫は妻の体に触れるのを避けていた。その慣習のことを〈ユーピテルの禁欲〉といったらしい。文頭にある不思議な形をした文字は、Pの音を表すギリシア文字のパイであろう。だが、右側に中途半端な長さの縦線がぶら下がっており、そのせいでガンマ（Γ）にみえなくもない。そうであれば、それはラテンアルファベットのCに対応するから、男の名はプーブリウスではなくガーイウスとなるのではないか。

【プーブリウス・ルティリウスの碑】

碑文を研究対象とするepigrafiaという学問がある。考古学でもラテン語学でもない、ひとつの独立した分野である。それだけ碑文の解釈には高度な専門性が要求されるということなのだ。だから筆者のような素人はほんの数行の碑文を読むにも、古典ラテン語の文法書には載っていない形をした語に難渋することになる。けれどもその代わりに、時代や作者の社会階層に応じて様相を異にする、ありのままのラテン語に触れることができる。

それにしても、遠い昔の人々が文字にたくした思い、彼らの喜びや彼らにとっての人生の意味に想像をめぐらす時間のなんて豊かなこと。こちらがリチェオに入学したくなるほどである。

＜参考資料＞

「山下太郎のラテン語入門」
https://www.kitashirakawa.jp/taro/

（元当館スタッフ）

わたしとロダーリ④

## 休暇に向けて《チャオ》の準備を

竹田　理乃

元号が改まって令和となりました。慣れない大型連休の余韻もそろそろ静まりましたが、宮中の儀式はまだ続くそうですし、来年にはオリンピックも控えていて、お祭り気分の盛り上がりはまだ途中といったところ。そうなると大変なのは、世間が賑やかなときに忙しくなるお仕事、そしてお休みが増えると収入減になってしまう働き方の方々です。

ところで、バカンス文化があることで評判のイタリアですが、やはりまとまったお休みを取れるのは、暮らし向きに余裕のある層が中心ですし、観光大国ですからいい季節こそが勝負時というところもあります。夏にはリゾートへ出稼ぎに行くという、貧乏学生時代に知り合って、就職難に苦しんでいた友人から「この夏は2泊3日でキャンプに行ける！」なんていうメールが届いたときには、目頭が熱くなってしまいそうでした。

休暇と労働について考えていて思い出されたのですが、このコラムでご紹介しているジャンニ・ロダーリには、世間がお休みのときに働く人たちに寄せる詩があります。

日曜日のフィラストロッカ
ちょっと陽気でちょっと憂鬱
憂鬱っていうのは悲しいってこと
日曜日はみんなにとってのお休みじゃない

車掌さんはお休みじゃないし
お巡りさんも運転士さんも
日曜日はパン屋さんもお休みじゃない
牛乳屋さんにとってもね
でも毎日が黒いろ
悲しいことを考えている人にはね
空腹な人は、まさにそう
毎日が月曜日

「Non per tutti è domenica」

【『Filastrocche lunghe e corte』表紙】
出典：https://www.edizioniel.com/prodotto/filastrocche-lunghe-e-corte-9788879268349/より

月曜日の扱いに、日曜日の晩になるとグズりたくなる気持ちは、洋の東西時代を問わず同じなんだなぁと苦笑しそうになってしまいます。

初めてこの詩を読んだときには、悲しい気持ちで過ごす日々の暗さを語るくだりで、もしやロダーリさんも、辛いときにも笑顔でいるタフさを求めるような、鬱に理解のないタイプだったのかと身構えたのですが、最後には人が幸福でいることのできない状況の存在を指摘して結んでくれて、ほっとした覚えがあります。ロダーリは労働を称揚しますが、人間を追い詰めて働きづめにする貧困に対しては、厳しいまなざしを向けていました。

たくさんの方々が久々にゆっくりとした休暇を楽しまれたことによる、バカンス文化への関心の高まりは、受講者の皆さまに長期の旅行を体験していただきたいと願う語学講師にとっても、喜ばしい傾向です。

語学マニアではない人が外国語を習得するには、学習意欲をキープするのに役立つ、気乗りのする使い道を見つけることが必要です。英語を習得できなかった私が、イタリア語はものにできた理由もそこで、試験で点を取ることが目的では、ちっとも勉強に身が入りませんでしたが、旅行に読書に友だち付き合いにと、楽しい使い道を見つけられたイタリア語はなんとかなりました。遠回りしましたが、イタリアで英語話者と知り合った結果、遅まきながら英語力も上昇を始めたような気がしています。

語学の使い道のなかで特にオススメなのは、やはり友だちを見つけることです。読書や映画鑑賞などは「まぁ日本語でもいいか」とひとりで諦めてしまいがちですが、友だち関係は一方的に辞められませんし、気の合う相手が見つかれば継続性は抜群です。

私もシャイな方なので、海外というアウェイで友だち作りなんてハードルが高すぎるのではないかと、怖じ気づいていたこともありましたが、ある程度の語学力さえあればそうでもありません。

たとえばメール友達のシンシア。私より10才ほど年上で、小さな田舎町で温かな家庭のよきお母さんをしている彼女とは、たった2回しか顔を合わせていませんが、もう数年に渡ってイタリア語で四方山話をする仲です。

彼女と知り合ったのは、ロダーリの故郷を目指す旅行の途中でした。宿泊予定の小さな村のホテルまで1㎞ちょっとの距離があったので、駅からタクシーを拾うつもりだったのですが、着いてみれば周囲には人影すらなく、かろうじて営業していたバールで質問してみると、観光シーズン以外はやっていないとのこと。途方に暮れたところを「夏だけタクシーをやっている友だちがいるから、電話してみるね」と申し出て、いろいろと世話を焼いてくれたバリスタがシンシアでした。翌朝、バスが出る前にもう一度バールに寄って挨拶したとき、記念にもらったショップカードの住所宛に、帰国してから「親切なバリスタさんへ」とお礼状を出したところ、そのお返事が届き、現在の友だち関係に至ります。

【シーズンオフで誰もいなかったホテル】

例に出すにはちょっと特殊な状況だったような気もしますが、自分から人を選んで話しかけたのがポイントです。道や列車について質問するときにも、カメラのシャッターを頼むときにも、怪しげな理由から観光客を物色している人物を避けるには、こちらから動く方が効率的。言語力の準備が整っていれば、話しかけやすさも、相手にとっての応えやすさも違ってきます。

助力を求めるだけでなく友だちを作りたいなら、準備すべきは語学力であり、また雑談力でもあります。日本好きと接触することの多い留学生さんなら、日本の歴史やポップカルチャーについて知っていると、順調な滑り出しが期待できます。ほかにも現地の料理でもサッカーチームでも建築でも、なんでもいいので「これが好きでイタリアに来たの」と説明できるような趣味を持っておくと、単なる受け応え以上の会話が生まれやすく、お互いの人間性も透けて見えるようになりますから、友だち獲得の確率がぐっと上昇します。

特に日本に興味があるわけでもなかったシンシアが、わざわざ私にメールを返してくれたのも、雑談が楽しかったからのようです。皆さんもきっと偶然知り合った外国人から、子どもの頃に自分も読んだ、たとえば『ごんぎつね』に

感動して日本語を勉強したなんて聞かされたら、嬉しくなっちゃいますよね。シンシアの地元の著名人であるだけでなく、ロダーリはイタリアを代表する児童小説家です。まだ見ぬ誰かとの共通の話題を作るという下心からでもいいので、ぜひ一度は彼の作品を手に取ってみてくださいね。

そんなことを言ったって、まずは語学学校の外で会話する相手が見当たらないんですけれど･･･というのは、短期留学でよく耳にするお話ですが、どうか挫けずにハードルを下げて、まず顔見知りを作るところから。気に入ったバールや個人商店にくり返し顔を出して、ゆっくりはっきりイタリア語で注文してみれば、顔を覚えてくれた店員さんからの反応があるかも知れません。挨拶から始めて、きちんと言葉が通じることをアピールするのがスタート地点です。

ロダーリの著書『ファンタジーの文法』の第3章に、ある幼稚園児が作った短いお話が載っています。先生が子どもに言葉をひとつ提示して、そこからお話を作るというゲームのなかで生まれた作品なのですが、紹介されたケースのお題は《チャオ》でした。

そのお話の主人公は「いいことば」をすべて忘れてしまい、汚いものや攻撃的な態度を示す「わるいことば」しか言えなくなってしまって、お医者さんの勧めで「いいことば」を探しに行く子どもです。いくつもの「わるいことば」のあとで、その子が最後に見つけたのは、ばら色の小さな《チャオ》でした。それをポケットに入れて持って帰った彼は、優しい言葉をいくつも覚えて、よい子になってハッピーエンドを迎えます。

新しい言語を習得しようと努力することは、新しい世界に生まれ直すも同然な大仕事です。自分のなかには日本語で身につけた知性があるのに、それを上手く表現することができなくて、まるで自分の頭が悪くなってしまったような感覚に苦しむこともあります。そんなときには攻撃的になってしまって、自己にも他者にも「わるいことば」を投げかけがちですが、言葉をめぐる探索を続けて、ばら色の小さな《チャオ》を集めていけば、きっと「いいことば」が芽吹くに至るはずです。

骨を折ってでも習得する価値が、イタリア語に限らず、ほかのどんな言語にもあるものと、私は信じていたいなぁと思っています。便利な翻訳ツールの開発はどんどん進んでいますが、本好きとしては、憧れの人にゆかりのある文章を、そっくりそのまま自分で噛みしめられるという贅沢は、それだけでも苦労の甲斐があるというものですし、自分のものではない言語を理解しようと努力することは、他者に対する好意の表現として、とても情熱的ではないでしょうか。

一期一会があったとき、そのご縁を楽しみ尽くせるように、ぜひとも「いいことば」の準備を整えておきたいですよね。その際には、日本イタリア会館の語学講座と、資料室に入っているジャンニ・ロダーリの作品を、存分に活用してみてください。

【ロダーリの故郷から見たオルタ湖】

＜参考文献＞

『ファンタジーの文法』(ジャンニ・ロダーリ著, 窪田 富男訳, 筑摩書房 , 1990)

Gianni Rodari, *Filastrocche lunghe e corte,* Edizioni EL, 2010

（当館語学講師）

編集・発行 /**(公財) 日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/